

J・アレレン学び集

FROM UNDER A HORSE'S HOVES

馬のひづめの 下から

2

金の器社

J・アレレン学び集

FROM UNDER A HORSE'S HOVES

馬のひづめの
下から

教者の紹介

みなさんに、ジム・アレン兄をご紹介します。アレン兄は北アイルランドの兄弟です。約四十五年前に主イエスを信じ、そのときから主に仕えてこられました。ご両親とも集会のクリスチャンです。また、伝道者として働かれたおじさんがおられます。

アレン兄は、初め教員としてマレーシアへ行かれました。十年間ほど学校で教えながら、もちろん伝道の働きも行いました。二十五年くらい前に、伝道者として推薦すいせんされ、今日まで、マレーシア始め、イギリスやアメリカ、カナダ、オーストラリアなどでよくみことばを学んでこられました。

今回、日本の兄弟姉妹方は、アレン兄の学びを楽しむことができるでしょう。

一九九二年五月

J・B・カー

目次

教者の紹介

まえがき

第一章	信者と歩み	9
第二章	信者と働き	31
第三章	信者と礼拝	55
第四章	信者と戦い	79
第五章	ヤベツ	101
第六章	ヒゼキヤ	123
第七章	イザヤ書五三章	145
第八章	ハガイ書	161

第九章　ピリピ人への手紙

第一〇章　へブル人への手紙四章

第十一章　パン裂き（主の晩餐^{ばんさん}）

第十二章　神の教会

第十三章　神の家（テモテへの手紙第一）

第十四章　エペソにある集会

第十五章　フィラデルフィヤにある集会

あとがき

「飛行機の翼の下で」の発行から、速いもので五年がたちました。

「いつになることか、わかりませんが、みこころならばふたたびお会いできることと思います」と「あとがき」に書きましたが、神様は、突然に道を開いてくださいました。今回、ジム・アレン兄の「馬のひづめの下から」を出版する運びとなりました。

前回は、多くの方々に購入していただき、励ましのことばもたくさんいただきました。もっともうれしかったのは、信者である私の母が少しづつ学び集を読み、読みきつてくれたことでした。もともと、姉妹方にも読んでもらえる学び集にしたいという願いがありました。また、出版の際、意図していたのは、ベントリー兄の学びをじかに聞いている感じで、文章を読んでいただきたい、ということでした。今回の学び集も同じ路線です。話しことばらしさをそのまま残そうと努めました。アレン兄の学びを、目の前で聞いている感じで読んでいただけますでしょうか。「馬のひづめの下から」というタイトルは、本文を読み進めていかれたときに、答えがあります。お楽しみに。

内容を少し説明させていただきますと、多くは書簡の学びです。各章のタイトルになっていないものでは、一章は、コリント第二からの学び。二章は、コリント第一。三章は、ヨハネ四章。四章は、エペソ六章。一二章は、使徒二〇章。一四章と一五章は、黙示録の七つの教会のうちの二つです。

今回の学びは、その中の一部も、たしか一度も印刷されていないと思います。しかし、いくらかの人には、コピーしてさしあげました。その中で、今は召された一姉妹のことを思い出します。病の中にあつてたいへんなときでしたが、「ハガイ書」の学びはめずらしいから、ぜひ読みたい、と伝え聞きましたので、さっそく手元に送りました。

末筆になりましたが、この出版のために、いろいろと骨をおつてくださった方々に、感謝いたします。

一九九九年一月

山梨にて

望月 初男

第一章 信者と歩み

一九九二年四月三〇日（木）

大京町（新宿）にて

みなさんとともに、今晚集まることができ、とてもうれしいです。みなさんの前でみことばを開いて話せることは、私にとって特権です。みなさんのために、神様がこれを用いて祝福してくださるように望んでいます。今晚、お話ししたいのは、「信者と歩み」です。もし主のみこころならば、あすの晩、「信者と働き」についてお話ししたいと思っています。

今晚、コリント第二の手紙四章と五章から読ませていただきます。まず、四章六節です。6節 「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。

この六節の、「キリストの御顔」ということばに注目してください。次に七節です。

7節 私たちは、この宝を、土の器の中に入れていっているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

次は、一四節です。

14節 それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前に立たせてくださることを知っているからです。

今度は、五章一節を読みます。

1節 私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。

さらに、五節からです。

5〜10節 私たちをこのことになう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました。

そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。

確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。

私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうが